



公立美術館博物館は「博物館法」(1959-)による「収集/公開/研究」が義務として課されている。「どのような」作品を対象としているかという主張は、個々の美術館で必ずアナウンスされている。これに比べて、画商は様々である。骨董商の許可や海外との付き合い、場所さえ持たなくとも画商として存在することは出来る。それでも画商には性格がある。どのような分野の作品を取り扱い、世の中に対してどのような役割を果たしているのかといった主張は、自称であれ他者からの決め付けであれ存在する。

ステップスギャラリーはコレクションを提示することによって、自らがどのような傾向のギャラリーであるかを明確にした。今回出品された作品は、十河雅典(1943年/日本/アクリル画/8点)、金在寛(1947年-韓国/版画+立体/6点)、フランク・ディテューリ(1947年-米国/写真/5点)である。ステップスギャラリーが国や作品の様式を問題とせず、「現代美術」を軸に活動していることが理解できる。各作品の制作年は記されていないが、作品を見れば近年の作品であることが分かるだけでなく、現代美術とは時空を超えて存在するのだから、気になることはない。

十河は《笑ウト死刑 笑ワナイト終身刑》という人体のようなキャンパスのシェイプを持つ作品を筆頭に、「SONY」「TODEN」「JAL」「UNIQLO」「TOYOTA」「JR」という、

世界に「誇る」企業名をペナントに記し、コカ・コーラのロゴを模した《Communi-Cation》、即ち「伝達」の作品を購入者にオマケとして用意した。使い古された言葉とその背後に隠れているイメージが見え隠れる。

金の作品は、立体の場合影が強く生じ、版画はエンボジングによって見えるものと見えないものが交差する。

ディテューリのモノクロ写真は時間が定かでない森、ピントの合わないベンチ、セザンヌ的なリンゴ、場所が特定できない建築物と人物、空間性が認識できない建物の隙間といった、写らないことを映すようになっている。

三者の作品に共通する事項とは、二元論である。しかもその二元が振幅し、真の姿を決して現さないところにある。人間はゲシュタルト心理学が確定したとおり、地と図を一度に両方認識することが出来ない。しかし現代美術とは一つの事象を確定することではなく、一つの作品から多様な認識と解釈、想像力を巡らせることを特徴とする。そのため、一つの作品が「作品」という名の権威となるのではなく、見る者が作品を創造することにその最大の特徴が存在するのだ。ステップスギャラリーのコレクションは、その中でも従来の絵画、彫刻、版画、写真といった定義を乗り越えようとする作品に満ち溢れているのだ。

